

アンコール遺跡群のうち、未解明の遺跡

奈良女子大学国際親善教授
上野邦一

アンコール遺跡群（図1）という、アンコール・ワットやバイヨンといった遺跡が著名であり、多くの書籍が出ていて、語り尽くされている感がある。ところが、建築を学んだ者にとって、あるいは建築という目でアンコール遺跡群を見ていると、遺跡群には不思議なことや分からないことが多くある。私が不思議に思う遺跡や疑問に丁寧に応えてくれる書籍や論文は、今のところ見いだせないでいる。カンボジア人研究者からの指摘で示唆を得たものもあるが、正確には分かっていない。

何がどういふ風に、不思議で疑問なのか、遺跡をどうみるかに興味を持つ方々に私が不思議に思っていることや疑問を提示し共有しておきたい。そして、将来解明されることを期待したい。記述は、考えついた順、気づいた順であり、記述の順にはとくに意味があるわけではない。遺跡ごとに疑問点を列記した方が理解しやすい面もあるが、共通した問題もあるので、問題ごとに記述する。アンコール遺跡群に関する未解明の問題は、本稿で述べようとしている事柄以外にも多

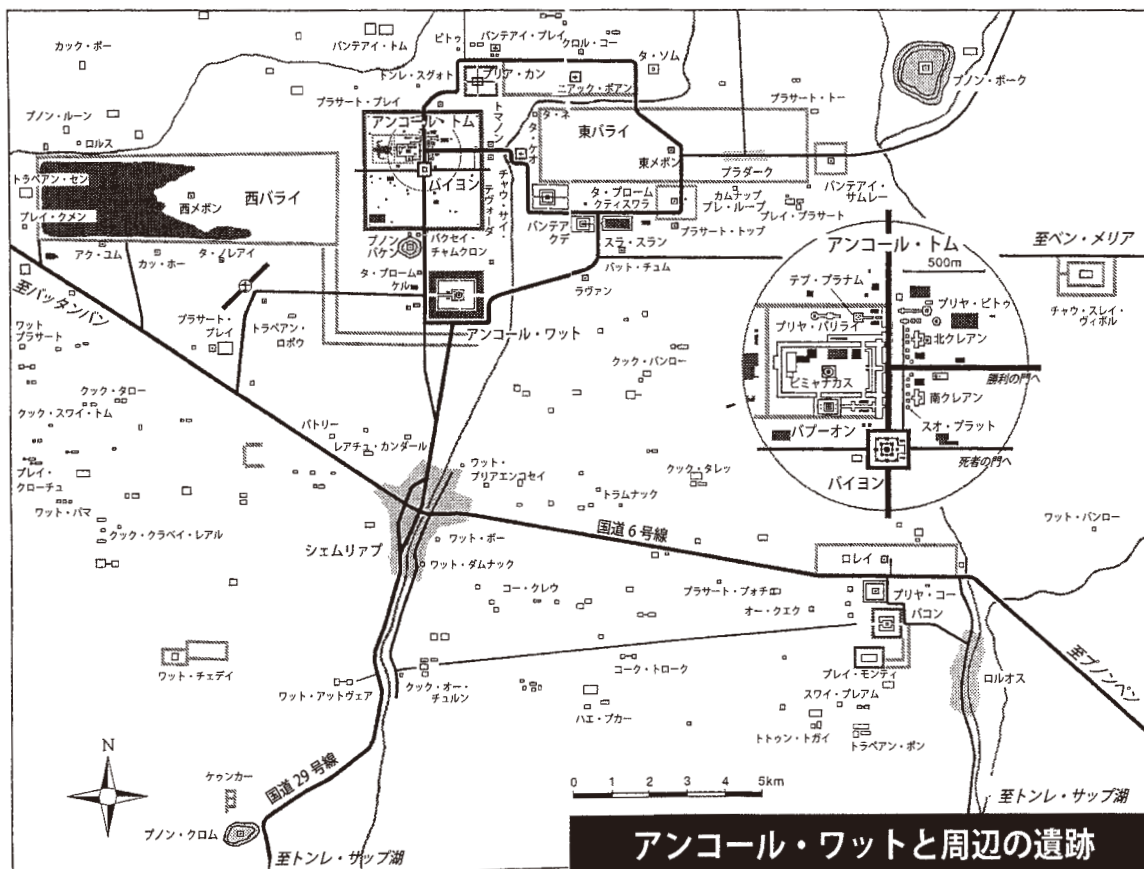


図1 アンコール地域の遺跡群 出典：『アンコール・ワットを読む』（連合出版、2005）

くあると思われる。その意味で本稿は、私が見聞した範囲で疑問を持った限られた問題提起であることをお断りしておく。

また手書きの資料を掲載するが、ほかに資料がないことをお断りすると同時に、過去十年の間での断続的にカンボジアに滞在して採取した図面で、近年の状況の変化を反映していない可能性があることもお断りしておく。

1 二階建て建築

プリア・カーンに二階建て建築とでも呼べる建物があり、PKU01と呼ぶことにする（図2・3）。この建物は伽藍の東よりで中軸線北より独立して建つ建物である。石造の柱を林立させる二階建て建物で、周囲には壁を主構造とする構築物ばかりだから、一見して異質な建物であることを印象づける。バンテアイ・クデイにある一棟（BKC17¹⁾、図4・5）、とタ・プロムにある一棟（TPU01と呼ぶことにする、図6・7）の、この二棟もPKU01に似ている建物であり、共通する性格を持つがバンテアイ・クデイの一棟もタ・プロムの一棟も一階部分しか残っていない。

これらの三棟の一階平面を見比べると、前後にポーチとでもいうべき空間があること、主体部の両端で双子柱を用いるなど、主体部の長手方向の柱間は七間と五間と異なるが、この三棟が共

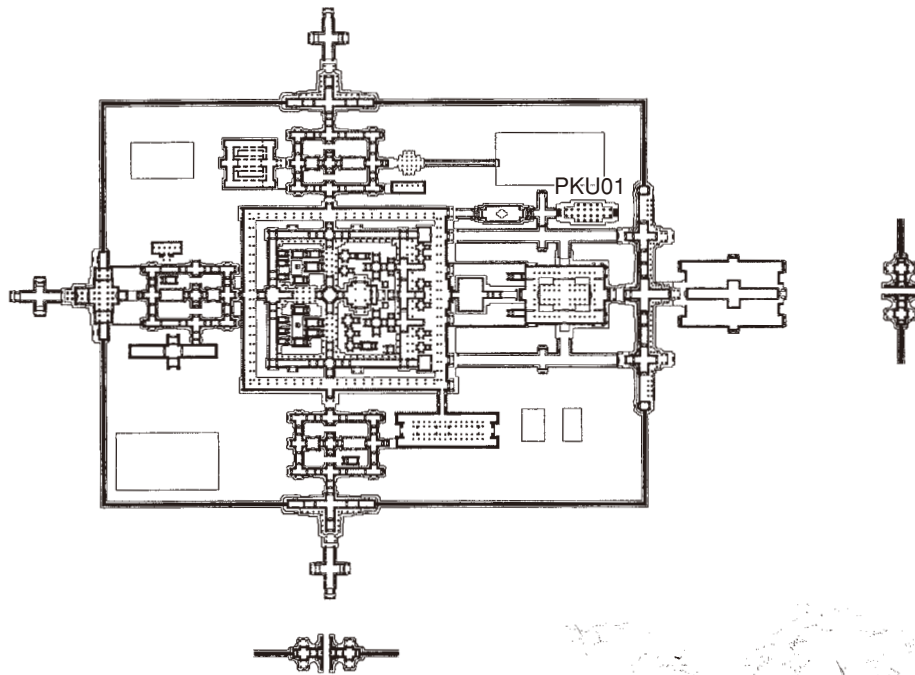


図2 プリア・カーン全体図
出典：『Art & Architecture of Cambodia』
(Thames & Hudson, 2004)

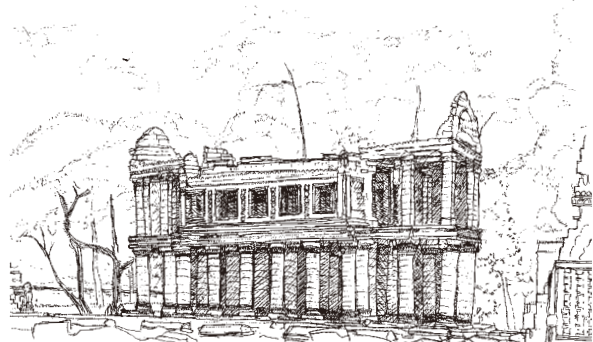


図3 プリア・カーン二階建て建築（PKU01） 筆者作図

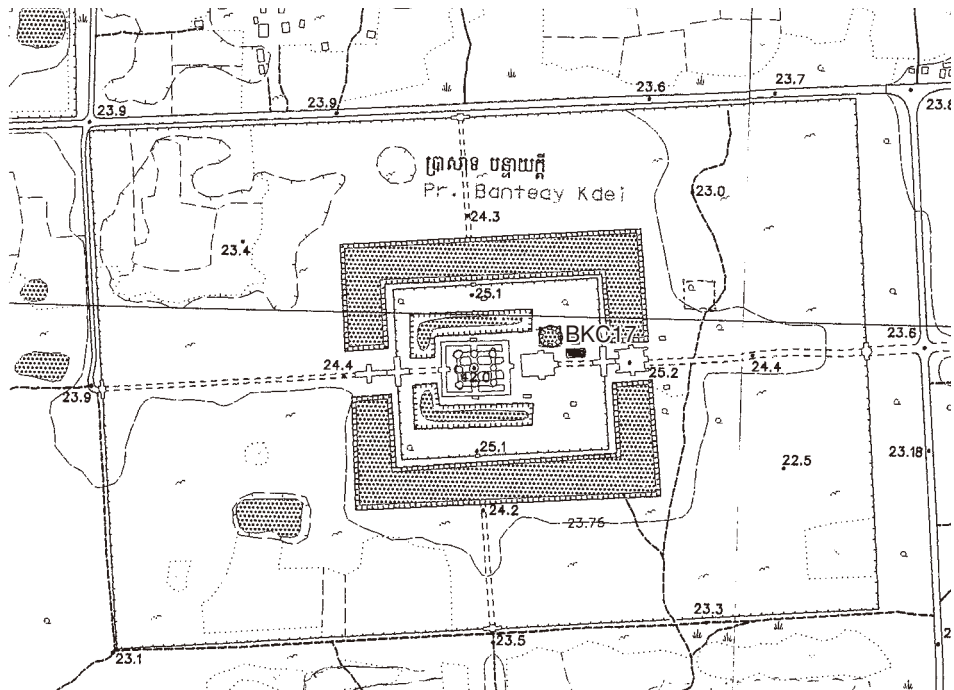


図4 バンテアイ・クデイ全体図 出典：JICA 作成地図

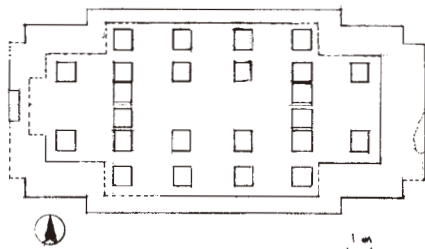


図5 バンテアイ・クデイの推定二階建て建築 (BKC17) 筆者作図

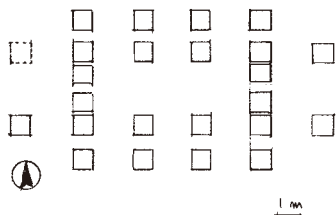


図7 タ・プロム 推定二階建て建築 (TPU01) 筆者作図

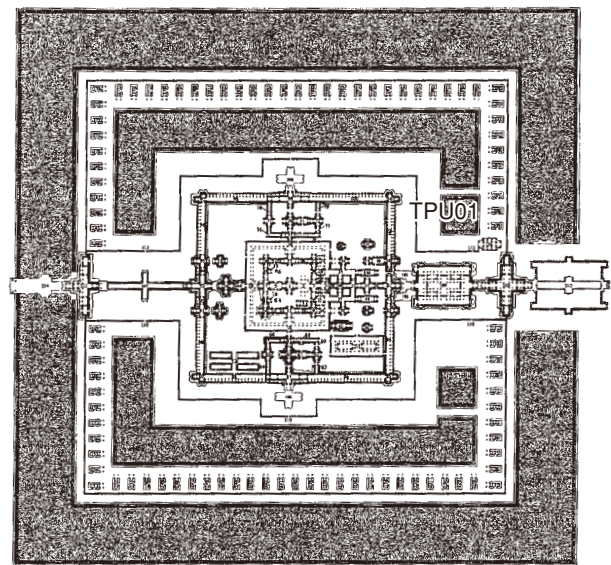


図6 タ・プロム全体図 出典：『Ta Prohm A Glorious Era in Angkor Civilization』(White Lotus, 2007)

通する属性を持つ建物であることが分かる。ここで双子柱とは、同じ柱を二本並べるので、このように呼ぶことにした柱のことである。これらの三棟の伽藍全体の中での位置を見ると、中心区画の北東に位置し、この点も共通する。すなわち、この三棟は同質の建物だろう、と考えることができるのである。

石造やラテライト構造の場合、通常はそれらを積み上げて壁を造り構造主体とする、建築用語で組積構造そせきこうぞうと呼ぶ構造にするのが多い。一方、木造は柱を立て柱上で梁で繋ぐ軸組構造じくぐみこうぞうが多い。木造でも、校倉造あべくらづくりとかログハウスのように木材を横に積重ねる工法もあるが、例外と言ってよいだろう。結局、石・レンガを構造主体とする場合は組積構造、木を構造主体とする場合は軸組構造が大勢ということになる。ところが、木造で横木を積重ねる組積構造に似た工法があるように、石造で軸組構造に似た構造を持つ建物が、PKU01、BKC17、TPU01なのである。この内バンテアイ・クデイのBKC17は一階部分に未完成の柱があり、建物全体は未完成で二階部分に着手していなかったかもしれない。またタ・プロムのTPU01は崩壊して全容が分からない。すなわち、石造で軸組構造のように見え、ほぼ完成した建物がPKU01なのである。この構造では迫り出しアーチを架けることはできないから、柱から上の構造を考えると、梁は木材であり小屋組は木造となる。屋根葺材は、草葺の可能性を否定はできないが、瓦葺と考えるのが妥当である。

PKU01は二階建てだが二階に昇る階段などの装置はない。もちろん、外側に梯子をかければ二階に昇ることができるが、二階に昇ることは無かったと思う。二階を何かに利用する、といった建物ではないだろう、と考えるからである。この建物は、機能上なにかの役に立つ建物ではなく、伽藍を構成する象徴的な存在価値しか見いだせない。

PKU01、BKC17、TPU01の三棟は同質の建物だろうとすると、この三棟は特定の機能を持たない、伽藍の構成要素としての建物ということになる。

2 オープンスペース、デッドスペース

オープンスペースというのはとりたてて何かの装置がないスペースで、空き地や広場のような場所を言い、デッドスペースとは、空間としてはある広がりを持つが、四方を壁に囲まれ閉鎖されていて利用できない場所をいう。

(1) 伽藍全体の方形区画と中心区画の位置

ロリュオス遺跡群のうちプリア・コー（図8）の建物配置を取り上げる。

ロリュオス遺跡群は、アンコール遺跡群の南東13kmほどの一帯にある遺跡群である。アンコール遺跡群が890年頃からであり、ロリュオス遺跡群はアンコール遺跡群に先立つ、870年頃の遺跡群と考えられている。このなかにプリア・コーと呼ばれている遺跡があり、祖先を祀った寺院だと解説されている。王朝の中心がロリュオスにあった時期に、プリア・コーは王宮ではないか、という意見をクロード・ジャック氏は『Angkor Cities and Temples』（66p）の中で述べている²⁾。

プリア・コーの寺院の配置を見ると、中心区画が方形の濠で囲む区画の東に寄っているのである。アンコール遺跡群に限らず、カンボジアで濠を持つような大きな寺院では、中心区画は方形の濠のほぼ中心で、正面側をすこし長くした場所に位置するのが通常で、東を正面とすると中心区画は全体の区画の中心やや西寄りになる、しかしプリア・コーは中心区画が極端に東に寄っている。濠が囲む方形の区画の西半分ほどがオープンスペースとなる。中心区画がなぜ東に寄っているのか、いくつかの理由が考えられる。

濠を掘った時期が先行し、中心区画を造営した時期が後になる、と想定するのは考えにくい。方形の濠が先にあれば、中心に建物を造るのが自然だからである。中心区画が先行して造営され

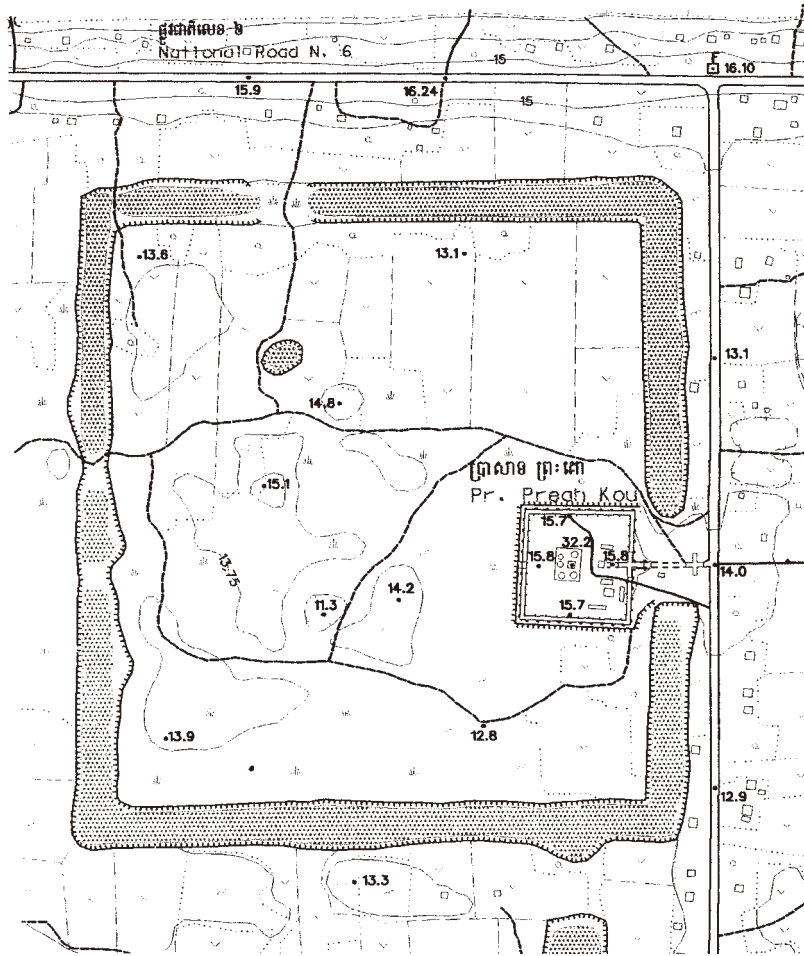


図8 プリア・コー全体図 出典：JICA 作成地図

て、壕がその後造営されたと想定するのが一案である。すなわち現在の中心区画が造営され、その後何らかの理由で、ロリュオス全体の道路計画のようなものがあり、中心区画が他と異なる異例の配置になった、と考える案である。このような事例として、平城京の条坊とずれた伽藍である奈良の海龍王寺がある(図9)。

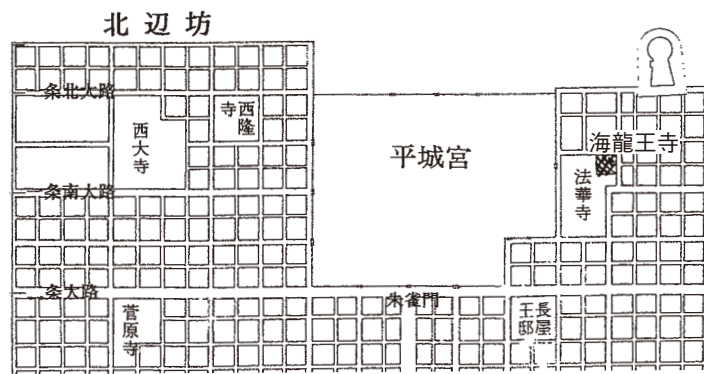


図9 平城京の海龍王寺 出典：『日中古代都城図録』(クバプロ、2002)の図に筆者加筆

があり、平城京の道の造営のときに何らかの理由で寺地を変更できなかったと、考えられている。古墳を削ってでも宮を造営しているほどだから、寺地を動かすことはできないことではないはずである。海龍王寺側に相当の理由があり、政権側もそれを認めざるをえない事情があったとしか考えられない。

プリア・コー寺院で四周する濠と中心区画との時期が違うとすると、ロルオス地区の寺院の造営時期と、都市全体の計画の造営時期との前後関係が問題となる。

第二案として、濠と現存中心区画が同時期とすれば、方形の濠で囲む区画の中央に現在の中心区画とは異なる中心区画を造る計画があったが、着手することなく建設されなかった、と考えることも一案である。この場合、アンコール地域では他に事例がない二つの中心区画を持った寺院となり、これも不思議なこととなる。ただし、日本では法隆寺のように西院伽藍と東院伽藍という二つの中心区画を持つ事例もあるので、二つの中心区画を持つこと自体はあり得ないことではない。

第三案として、現在オープン・スペースとなっている場所に王宮があったとするものである。プリア・コーに王宮があったのでは、という説があることは前述した。この方形の濠の中に、東に寺院、中央に王宮という配置は想定しうる。この王宮の建物はすべて木造建物であったので、王宮が廃絶後に建物群は朽ちて、その結果、中央の一带に顕著な建物の痕跡が現在見いだせない、と考えるのである。中心区画での発掘調査が必要で、その成果によって中心区画が東に寄る理由が明らかになることが期待される。

(2) オープンスペース

バンテアイ・クデイ (図4)、バンテアイ・プレイ (図10)、アンコール・ワット (図11) など多くの寺院には、外周壁と内周壁との間にオープンスペースがある。現状では樹林が覆っていて遺構の確認ができない。バンテアイ・クデイでは2003年から2015年にかけて D11 と呼ぶ建物と北のラテライト周壁との間で発掘調査を行ってきた。その結果この地区には目立った建物はない。ポスト・アンコール時代に属する遺物が出土するので、その時期に人間の営みがあったと推定できるが、アンコール時代には単なるオープンスペースだったのか、と考えざるを得ない。

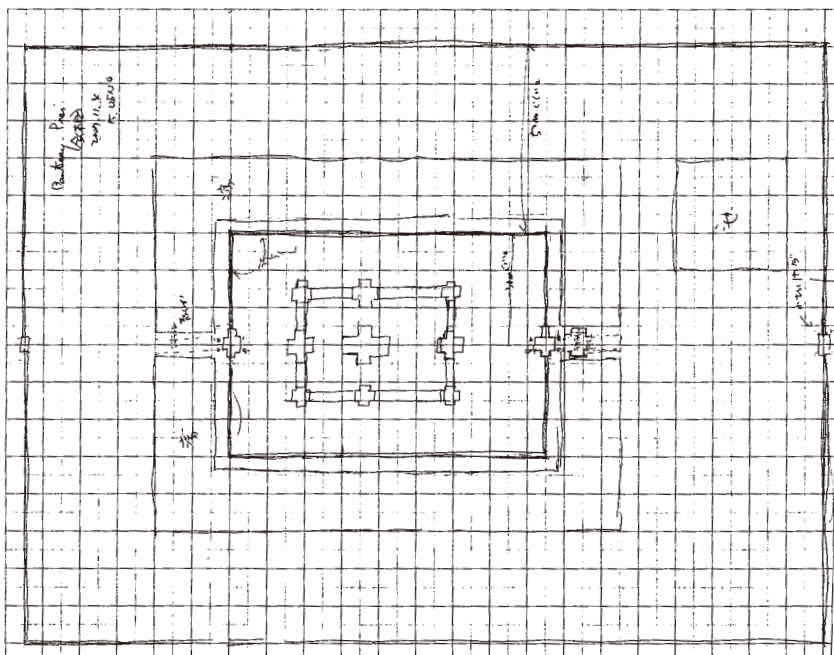


図10 バンテアイ・プレイ
筆者作図

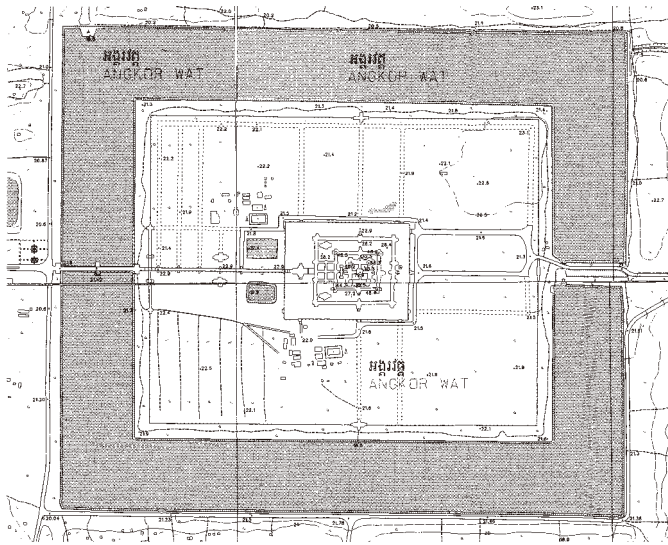


図11 アンコール・ワット全体図 出典：JICA 作成地図

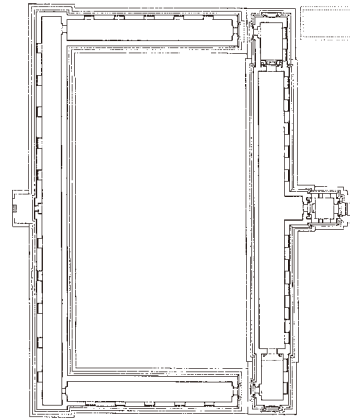


図12 ワット・プー南宮殿
出典：UNESCO、ワット・プー
保存プロジェクト

ベンメリアやタ・ソムでは、外周の濠と中心区画の間にオープン・スペースがある。

本稿は、アンコール地域の建物についての考察が中心であるが、クメール建築は現在のタイやラオスにもあり地域的に広がる。クメール建築でオープンスペースを持つ建物の事例がラオス・タイにあるので取り上げておく。ラオス南部にあるワット・プーに宮殿と呼ぶ建物（図12）があり、廊下状の細長い建物が四辺を囲み、囲まれた中心部分がオープンスペースと考えられる。このワット・プーの宮殿に似た建物がプリア・ヴィハール、プリア・ヴィハール近くのプラサート・ナック・ブオス、コーケルのプラサート・トムの東の二棟、などがある。四辺を囲む建物がすこし違うが、四辺を囲み中央にオープンスペースを持つ建物がプラサート・クナルにもある。

これらの方形建物の廊下状で囲まれた内側のオープンスペースは、機能・意味が不明である。外側から見たとき規模が大きい建物として見えるようにしたのではないかと考えることもできるが、確実ではない。

（3） バンテアイ・サムレのデッドスペース（図13）

回廊の一部は四周を壁で閉じていて入れない。仕切り壁の施工状況から見て造営当初からと考えられる。デッドスペースを設ける事情は不明である。

（4） 王宮の西にあるデッドスペース（図14）

アンコール・トムの北一帯は王宮であったといわれ、その区画の西端に高い壁で囲まれた一画がある。門が見あたらず、四周が壁で閉鎖されていて入れない。機能・意味は不明である。

（5） 小結

「無駄な空間」という考え方や、合理的空間のあり方は近代的な考え方で、こうした近代的な考え方とアンコール時代当時の様相とに齟齬があっても近代以前では問題とはならなかったはず

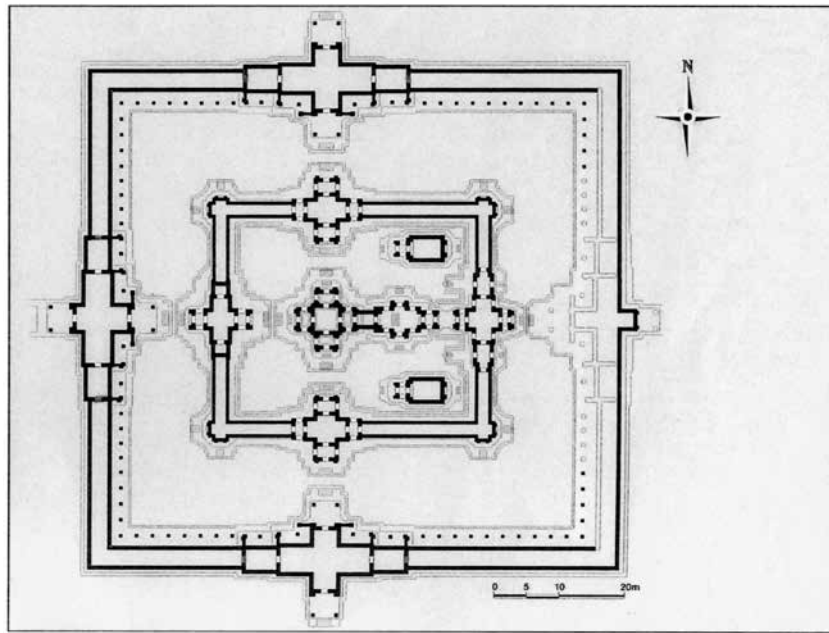


図13 バンテアイ・サムレ中心部 出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）の図に筆者加筆

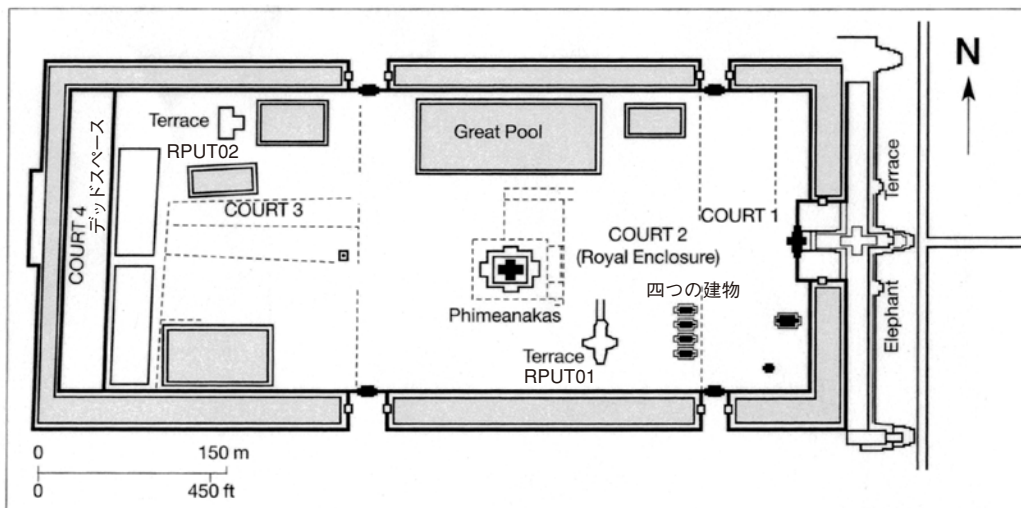


図14 アンコール・トム 北半部全体図 出典：『Angkor and The Khmer Civilization』（Thames & Hudson, 2003）

である。現代風に言えばオープンスペースやデッドスペースということになるが、当時は気にならないスペースで、全体の形や様相を整えるためであれば、そうした空間を設定するのは問題視されなかったであろう。

3 なぞが多い王宮

アンコール遺跡群の中にアンコール・トムという遺跡があり、その中心にあるバイヨン寺院はとくに著名である。アンコール遺跡群を訪問する人は、必ず行く寺院である。バイヨン寺院の北に王宮と呼ばれている区画がある（図14）。ピメアナカス寺院以外には、あまり人は行かない。

この王宮一帯に不可解な遺構が多数ある。

大穴の痕跡、意味不明のテラス、基礎のみが残る遺構などである。順次取り上げて行きたい。王宮内にあるデッドスペースについては前述した。

(1) 王宮に残るいくつかの大穴

(その1) ピメアナカスの基壇に残る大穴 (図15)

ピメアナカスは、王宮のほぼ中央にある遺跡で段状に基壇をたちあげ、最上段に祠堂を建てる。この段状の基壇上面に、多数の大穴を見いだすことができる。

これらの大穴を見ると、まずこの穴に何かを立てて柱状とし、ある構築物を建てたのではないかと考える。ところが、穴の径が60-80cmとあまりにも大きいので、径がそのまま柱径だとすると、太すぎて柱穴かどうか疑わしくなる。柱穴でないとすると、それでは、何のための穴かがさらに謎めいてくる。

柱だとして、まず石柱の場合を考えるが、この径に見合う円形の石は周辺で発見できてない。もし石柱を立てていたなら、他の遺跡と同じようにならず石柱の数個は残る、と考えられる。ところがまったく石柱の破片に相当する石片は発見できないので、石柱が立っていたことは考えられないことになる。ピメアナカスがいったん出来上がったあとに、出来上がった基壇を傷つけずに石を持ち上げる作業は不可能であろう。頂部の祠堂は当初ではなく、最初は木造であった祠堂が、後に現在のような砂岩の祠堂にしたと考えると、作業用の足場が必要で石を運び上げるから相当頑丈な足場が必要となる。この足場のあとが、大穴ではないか、という仮説をたててみる。この場合現存祠堂は二次的であることになる。

いずれの説も弱点がある。大穴の様相は東と西が共通し、南と北も共通し、対面する二辺は共

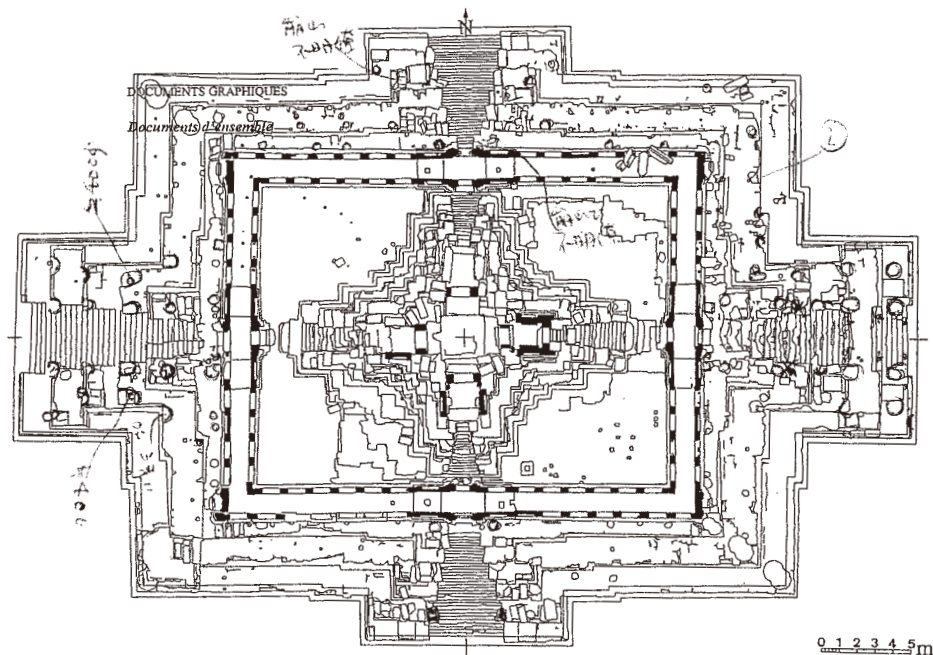


図15 ピメアナカス全体図 出典：EFEO

通するが、直交する二辺は異なる。また、この大穴群が作業用足場であれば一カ所でもよいのではないか、という問題が残る。何かの作業用の足場ということは考えられないことになる。四辺に何か構築物を建てるのは、儀式に際して仮設建物を建てる場合が想定できるが、儀式のときだけのための仮設建物に巨大な柱を用いることは不自然である。ただ、ピメアナカスを荘厳するために壮大な構築物を必要とした、と考えればあり得ないことではない。

(その2) ピメアナカス周辺の大穴

ピメアナカスの北側に、砂岩の建物基礎が見え隠れしている。この基礎を丁寧に見ると、大穴が秩序だって並んでいることが分かる。詳細は未発表だが、ピメアナカスの南側での発掘調査でも大穴を検出している。

ここでも穴の径は60cmほどであり、ピメアナカス基壇の穴にほぼ同じ大きさの穴である。秩序だって並ぶので、ある構築物の柱穴だと考えることができるが、ではどういう構築物かという点と不明としか言えない。

穴が大きいので、柱も穴に相応して大きいと考えると、柱が大きいことは建物も相当大きいと考えなければならない。

(その3) 四つの建物の大穴 (図16)

ピメアナカスの東南100mほどにある四つ並ぶ建物(RPUB01-04とする)が目される。四つの建物は、東西5m、南北3mほどの主室に2m四方ほどの前室を持つ建物で、とりたてて特徴があるわけではない。しかし、四つの建物の側面に残る大穴が奇妙な痕跡なのである。現存するのは4つだが、もとはさらに左右に同規模の建物が並んでいたかもしれない。この四つの建物について、デュマルセは『ARCHITECTURE and its MODEL in SOUTH-EAST ASIA』(p36)の中で取り上げ³⁾、四つが微妙に大きさが違うことを指摘している。そして、基壇に残る大穴が建物を覆う木造構造物と考えていることを脚注で記述する。

穴の径・形状はいくつかあり、半円形で径70cmのもの、方形で44-55cmなどがある。

基壇脇の大穴は、対面する基壇の大穴と対応する場合と対応しない場合とがある。対応する場合は建物の間に、構築物を造り何かにか利用することが考えられる。しかし、対応しない場合をどう考えるのか。ピメアナカスの基壇上にある大穴が、ピメアナカスを覆うような構築物だったとすると、四つの建物の基壇脇の大穴も建物を覆う構築物だった可能性がある。ただ、こうした小建築を大型の構築物で覆うことはイメージしにくい。結局、大穴は不明のもの、ということになる。

(大穴の考察：まとめ)

ピメアナカス基壇上や、その周辺で見つかる大穴は、秩序だって並んでいるので、ある構築物であったと考えられる。足場穴と考えるには、柱が大きすぎるし、

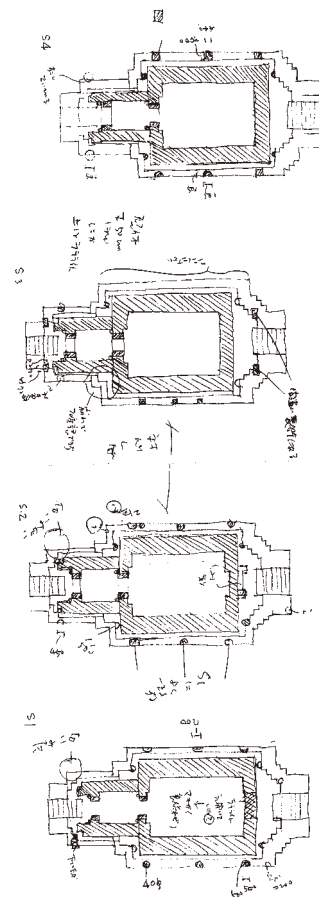


図16 四つの建物の大穴
筆者作図

足場はいわば仮設の構築物だから、巨大な柱を立てることは考えられない。

大穴の中を観察すると、中に何も残っていない。石柱だと意図して撤去しないかぎり、何か残るし近辺に石が散乱するはずである。大穴は柱の大きさを示すのではなく、礎石あるいは基礎を入れて、ほぞを穿って木の柱を立てた、という想定も不可能ではない。この場合でも、礎石や基礎が石であれば、その一部が通常は残る。何一つ残らない、ということは考えにくい。

木製の基礎を入れて、木の柱を立て、その後朽ちて掃除を繰り返すと何も残らないことが起こるかもしれない。しかし、木の場合でも一般的には何も残らないことは考えにくい。破片が散乱しながしかの痕跡が残るものである。

ゆえに、現状で跡形もなく穴のみが残る構造物を想定することが困難なのである。

足場穴や構築物だと、基壇上に均質に穴が残るはずである。ところが前述したようにピメアナカスでは、階段の両側の大穴が顕著で大きく、その他の基壇上面にある穴は階段両脇に比べれば小さい。また、南北二辺と東西二辺とでも穴の様相異なり、東西と南北で構築の仕方が違う構築物を示唆しているかもしれない。

構築物の性格・形状は不明だが、大穴で構築物を建てることを得意とする工人集団がいたのではないかと私は考えている。柱を立てたとして、石柱にせよ、木柱にせよ、未知の構造である。

(2) 王宮内のテラス

王宮の東にある、象のテラス、ライ王のテラスは著名で訪問者が多い。一方、王宮内にありながら誰も訪れない単独のテラスが二カ所ある(図14)。登壇して、どういう行為を行うためだったのかが分からないテラスである。

一つはピメアナカスの南東100mほどにあるしっかりしたテラスで十字形である。RPUT01と呼ぶことにする(図17)。もう一つは、ピメアナカスの西北200mほどの位置で、女の沐浴場という方形池の西にもう一つ小さい方形の池があり、そのさらに西にテラスがある。RPUT02と呼ぶことにする(図18)。鍵形であることが珍しい。

アンコール地域でテラスと言えば、多くは十字形テラスで寺院の主区画へ入っていく手前にある。あるいは仏教テラスと通称され、中心区画の前にある。いずれにしても、崇拜物へのアプローチ途中にある。ところが、RPUT01もRPUT02も単独のテラスであり、何かの前にあるという訳ではない。

RPUT01は、十字形で側面に柱を立てるタイプである。四辺に階段があるが、十字形の形状か

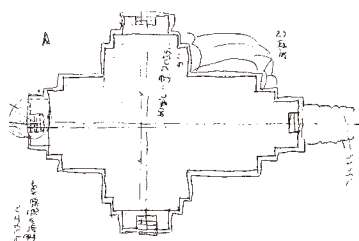


図17 王宮内テラス RPUT01 筆者作図

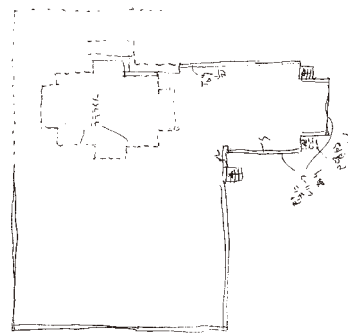


図18 王宮内遺構 RPUT02 筆者作図

ら北が正面となる。上面はほぼ平坦で、祭壇に相当する壇はない。

RPUT02は鍵形で、階段の様相から東が正面で、北西に一段高い壇がある。この北西の壇は低い祭壇であろうか。壇上には、現在何もない。鍵形になったのは改造によるもので、当初は方形か十字形のテラスだったかもしれない。正面中央に階段がなく、西トップ寺院のテラスのように正面両脇から昇る。

RPUT01とRPUT02の二つのテラスは、現況からは当初の持っていた機能を想定することはできない。しかし、造営当初はある機能を持っていたことは充分考えられる。

(3) 王宮の北一帯にあり、基礎部分のみが残る遺構

主要な遺跡や、目につく遺跡の大半は、すでに地図やガイドブックに掲載されている。こうした地図・ガイドブックに出てこない、目立たぬ小さい遺跡がある。目立たぬ小さい遺跡であるのに、私には気になる遺跡が複数あるので、取り上げておく。

ライ王のテラスが北で途切れ、その北にテップ・プラナムと呼ぶテラスがある。テップ・プラナムの南に方形の遺跡がある。方形遺構 RPUX11と呼ぶことにする(図19、20)。南北23mほど、東西24.5mほどで、中央に7.3m四方ほどの方形基壇跡がある。中央の基壇跡や四周する回廊跡に、上部構造にかかわる石材が認められないので、木造の構築物があったと考えられよう。回廊の四辺中央には回廊より幅広い区画があり、四辺に門を設けていた基壇痕跡だろう。この遺構の西に、RPUX11よりも一回り大きい、東西43mほど×南北27mほどの方形遺構があり、RPUX12と呼ぶことにする。この遺構は方形であることが辛うじてわかる程度にしか石列が残るだけである。前述の方形遺構 RPUX11や後述する方形遺構 RPUX13の事例から、ここも木造祠堂の跡ではないかと考えている。さらに、テップ・プラナムの南50mほどのところに直径3m弱の円形で、円周に沿って砂岩を並べる遺構があり、RPUX13と呼ぶことにする(図19、21)。中央の円形遺構を方形の基壇で囲む。この遺構も木造の祠堂の土台と考えられる。方形遺構 RPUX13は、RPUX11

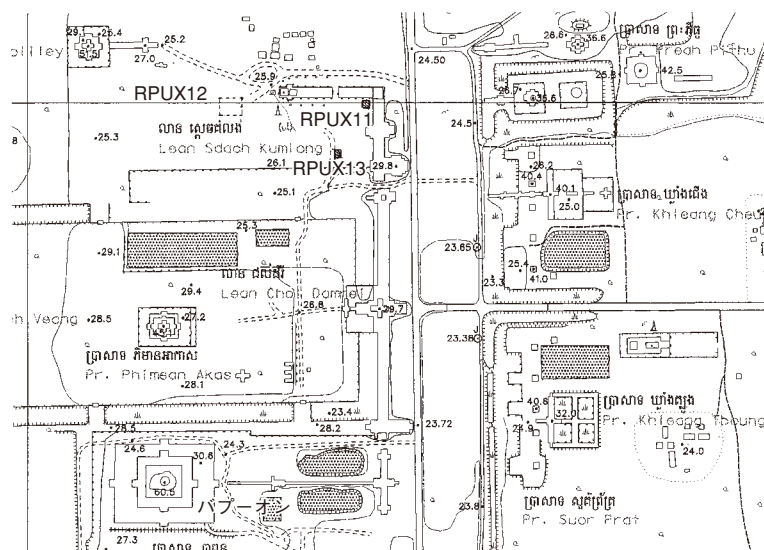


図19 王宮北方の遺構 出典：JICA 作成地図に筆者加筆

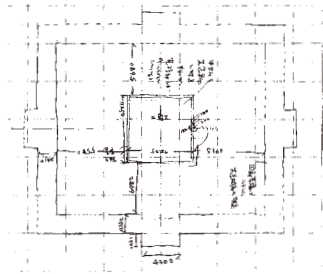


図20 王宮内遺構 RPUX11
筆者作図

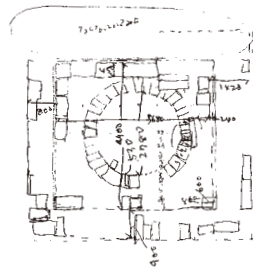


図21 王宮内遺構 RPUX13
筆者作図

の南西40mほどに位置する。5 mほどの方形の囲みの中に径3 mほどの円形の壇状遺構がある。建物の低い基壇と考えられる。RPUX11、RPUX12、RPUX13の三つの遺構が、木造建物の基壇だとすると、この一帯に木造祠堂が少なからず建っていたことになる。この一帯に集中する理由は分からない。私は、アンコール・トムの王宮の北一帯は、プリア・ピトゥの遺構も含めて勘案すると、死者のための鎮魂の空間ではないかと考えている。

4 飾りの参道・テラス

参道は本来、人がアプローチする機能を持っている道である。ところが人がアプローチできない・しない参道があり、このような参道・テラスを「飾りの参道・テラス」と名付けた。参道とテラスは連続していて一体になっていることがあり、分離せずまとめて記述する。

(1) 飾りの参道

バンテアイ・サムレには西側にも参道がある(図22)。参道を持つ寺院は複数あるが、片側にある場合は、いずれも東側にあるのが多数である。バンテアイ・サムレも東に参道をもつが、西にも参道があり、東西両側に参道がある。他に東西に参道があるのはアンコール・ワットやプリア・カーンがある。プリア・カーンの東参道は樹林に覆われて確認できないが、東参道があると考えられ西にも参道がある。東参道の方が長く、中心区画は壕で囲む方形区画のやや西よりになることになる。このように、クメール寺院では東を正面とし中心区画は伽藍全体の方形の中心からやや西より位置するのが多い。アンコール・ワットは西を正面とするので、中心区画は、伽藍全体の中心のやや東よりになる。すなわち、参道が正面・背面と両側にあるときは、中心区画が背面側にすこしずれる分だけ、正面側の参道が長くなる。

バンテアイ・サムレでは現状を観察するかぎり西参道の方が、東参道より長い。環濠や四周する壁は確認できていないが、参道の端を辺とする伽藍全体の方形区画を想定するとしたら、中心区画が東よりになる。前述したように参道の長短を問題にすれば、バンテアイ・サムレは西向きの要素を持っていることになる。ところが、現在のバンテアイ・サムレは東正面である。

さて、バンテアイ・サムレの西参道の西端は東バライの土手に行きあたり、正面から人がアプローチすることができない。東バライが、バンテアイ・サムレより後に掘削されたのであれば、参道がバライの土手で行き止まりとなることは一応説明できる。しかし、東バライの掘削は890年ころとされているから、12世紀前半ころの造営とされるバンテアイ・サムレよりも古い。いわ

ば道が土手でふさがれているのに、参道を造ったことになる。

東バライを掘削する時期に、現バンテアイ・サムレの前身寺院があり、西を正面としていて、その参道を受け継いでいけば、バライに突き当たる西参道が残る、と説明できるが、少なくとも現存する西参道は12世紀前半と見てよく、前身寺院の存在は確認できていない。

チャウサイ・デ・ヴォーダには東に参道がある（図23）。この参道の東端はシエムレップ川である。川に橋を架ければ、参道の線上から参道へ入っていくことができるが、現状を観察するかぎり橋を架けた様子がなく正面からアプローチしたことがない、と考えられる。この東参道は、実際にアプローチするための参道というよりも、寺院の構成要素としての参道、いわば飾りの参道ではないだろうか。とすると、バンテアイ・サムレの西参道の西端が東バライの土手でふさがれていても問題はない。この西参道も、いわば飾りであって人がアプローチできなくてもよいからである。

リングを両側に並べる参道の成立が、何時、どの寺院から始まるのか明確ではない。リングを並べる参道を寺院に設けることが定着すると、相当な規模の寺院では参道を設けることが普通となったはずである。バンテアイ・サムレ西参道やチャウサイ・デ・ヴォーダの東参道は、実際に人が歩むかどうかは問題にならず、形式的に参道を設ける考え方が定着したあとの寺院だろうと私は考えている。

（2）参道・テラスを付加する事例

アンコール遺跡群の寺院には、祠堂やゴープラの前に参道・テラスを設ける例が多くある。しかし、その多くが後補である。

チャウサイ・デ・ヴォーダ（図23）、パパーオン（図19）の参道は後補であり、バンテアイ・クデイでは東の十字テラスと、ゴープラと前柱殿をつなぐテラスも後補である（図4）。バンテアイ・サムレ中心部（図13）の東のテラスも後補である。西トップの仏教テラス（図24）も当初ではなく後補で、正面中央に階段がなく、正面両脇から昇る。西トップ寺院の仏教テラスには柱の痕跡があり、木造建物が建っていたことを示す。付近からは瓦が出土する⁴⁾。

どの寺院が当初から参道・テラスを持つ事例の寺院で、その後、テラスを持つ寺院はどう展開していったのか、は今のところ不明である。仏教テラスといわれるものは、仏教の展開と関わっているように思える。

寺院造営中、祠堂やゴープラが出来上がった後に、参道・テラスを造ることは施工手順として妥当であろう。現存する参道・テラスの多くは、施工の手順による時間差とは考えにくい。当初から参道・テラスを計画していれば、祠堂の正面に階段は造らないだろう。ところが、上に示した事例は祠堂の正面に階段を設けたあとに階段を塞ぐようにテラス・参道を造っている。ゆえに、当初は参道・テラスを造る計画ではなく、祠堂などがいったん出来上がったあとに付加した、と考えざるを得ないのである。

東南アジアの遺跡には増拡という現象がある。いったん造営した構築物・建物を拡大する行為で、その中には前身構築物・建物を覆ってしまう事例がある。アンコール・ワットの西参道とゴープラの接点あたりの石敷面にも増拡しようとした痕跡がある。増拡は、先行者が造営した構築物・建物をより立派に・より大きくするのが一般的である。テラスを付加することは、この増拡

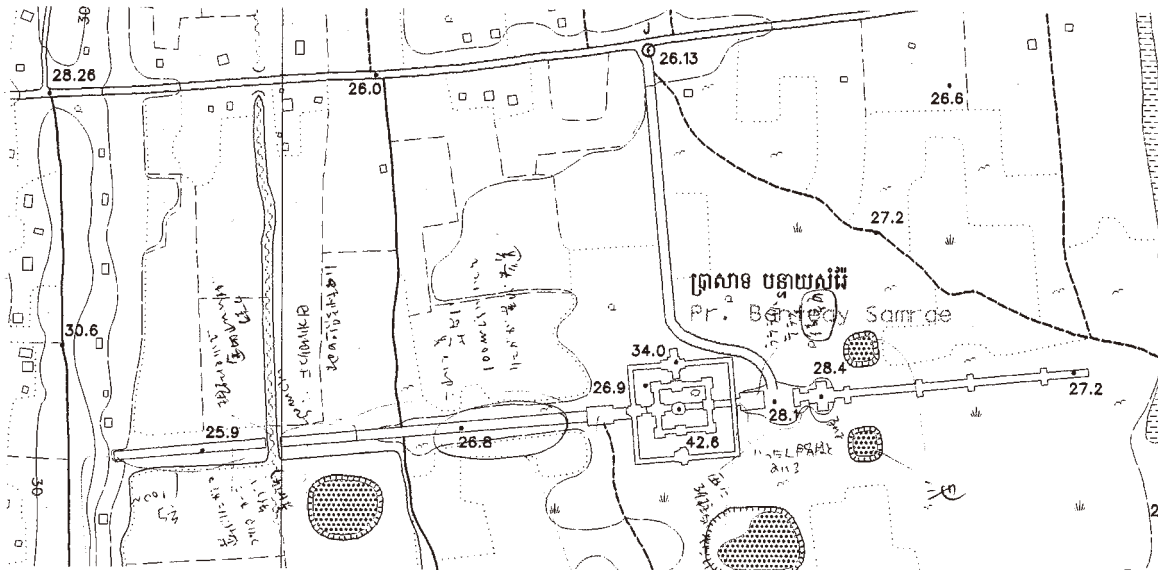


図22 バンテアイ・サムレ全体図 出典：JICA 作成地図

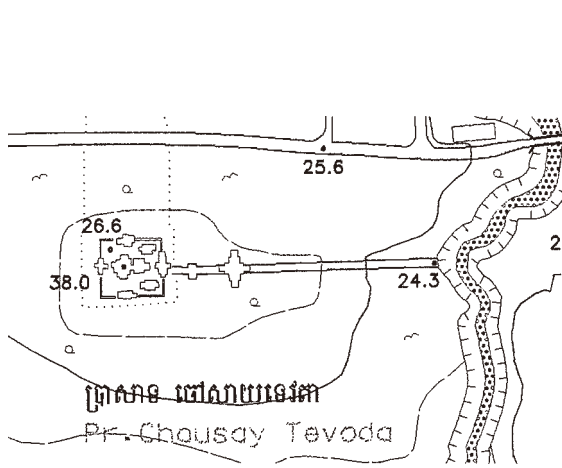


図23 チャウサイ・デ・ヴォーダ全体図
出典：JICA 作成地図

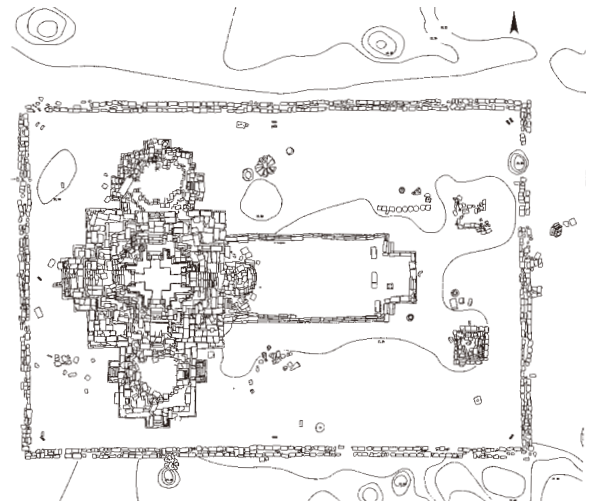


図24 西トップ全体図 出典：『西トップ遺跡調査報告—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—』
(奈良文化財研究所、2011)

ではないか、と私は考えている。

5 タ・プロムの93の小建築 (図6・25)

アンコール遺跡群の一つにタ・プロム寺院がある。榕樹の大木が遺跡にまわり付いて、自然と遺跡の取り合わせに人気があり、訪れる人が多い遺跡である。この寺院の中心区画の堀の内側に93棟の小建築が並び建つ。残りが悪く建物と認識できないものも多いが、こうした小建築を数多く並べるのはアンコール遺跡群では他に例がない。

小建築は、長辺6.5m、短辺3mほどの矩形の空間に、前面に二本の柱を立てた平面である。崩壊しているものが大半だが、建物全体の様子が分かるものが数棟ある。これらの小建築の機能は分からない。僧侶が生活する建物、僧侶が瞑想する場、崇拝物を安置する小堂、などが候補と

して考えられるが、決め手がない。

アンコール地域にタ・プロムのように中心区画の周囲に小建築を並べる例が他にないということは、逆にタ・プロム寺院が、他とは異なる役割を担った寺院ではないか、と私は考えるのである。ジャヤヴァルマン七世は、タ・プロムを初め、似通ったバンテアイ・クデイ、プリア・カーンの三寺院を建立している。それぞれ、タ・プロムは王の母のため、プリア・カーンは父のために造営した、と考えられている。死者のためだけの寺院ではなく、それぞれが異なった役割を担って造営されている、と考えられないだろうか。

なお、同じ性格の空間かどうか不明だが、インドのカイラーサナータ寺院（図26）や、パキスタン・タキシラのジョーリアーン寺院、バングラデシュのバハールプル寺院、インドネシアのプナンバナヤプラオサンなどに、中央区画を小空間が囲う事例がある。

6 クロル・ロメアス（図27）

アンコール・トムの北大門をでて北東600mほどのところにクロル・ロメアスと呼ぶ円形遺構がある。幅2.4-3.0mほどの砂岩でできた壁体が直径約50mの円形をなし、中央部はオープンスペースとなっている。丁寧に実測していないので正確な形状は不明だが、円形に近いが真円ではなくすこし歪みがある。壁は二カ所で途切れ、その内一カ所には扉の痕跡がある。二カ所に入出口があったと考えられる。

壁体の内側には、3mほどごとに仕切りがあったことが分かる。壁に柱が立った痕跡があり、木柱を建てた木造の間仕切りと考えられる。柱径は25-30cmほどである。内部に痕跡が認められず、構築物を具体的に想定することはできない。

クロル・ロメアスとは、犀（ロメアス）の飼育舎・飼育場（クロル）という意味で、他に象の飼育舎であったという言い伝えもある、という。この遺跡からは、クメール研究者なら誰でも知っているジャヤヴァルマン七世像が出土している。この彫像が出土するような遺跡でもあるので、単なる動物飼育施設とは考えにくい。また動物を飼育する施設なら円形のプランにする必要はなく方形の建物のほうが構築物を造りやすいはずで、この点からも動物飼育施設とは考えにくい。2.4-3.0mほどの分厚い壁を回す必要性もない。出入り口が二カ所あるのも疑問である。

動物飼育施設とは考えにくいですが、犀か象の飼育場としての可能性を検討してみよう。ブリュノ・ダジャンスは著書『アンコール・ワット』の中でクロル・ロメアスは象の調教場であるとい

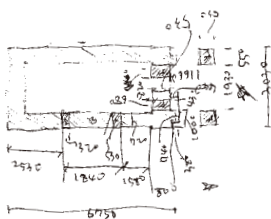


図25 タ・プロムの小建築
筆者作図

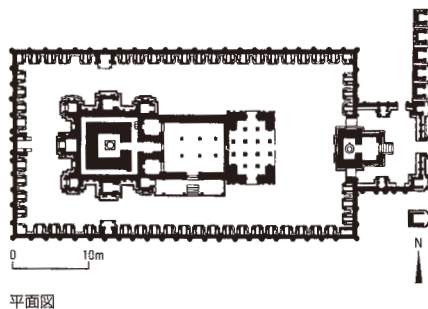


図26 カイラーサナータ寺院 出典：『インド建築案内』（TOTO 出版、1996）

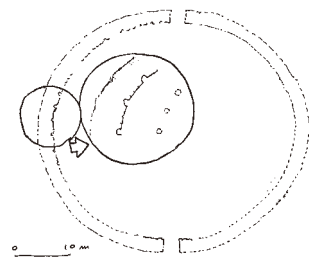


図27 クロル・ロメアス
筆者作図

う見解を示している⁵⁾。(93p) クロル・ロメアスが象の飼育舎とすると想定される木製の一区画が小さく、象よりも小さい動物の飼育舎の方に可能性がある。

アンリ・ムオが19世紀末期にアユタヤにあった象囲いについて記述している。象の飼育舎・調教場ではなく、国王が使う象を選別する行事用である。四辺形の建物で二重の囲いがあると記述する。このアユタヤの象囲いは遺跡として残っている。クロル・ロメアスも、子象を選別するような儀式を行う施設だった可能性はある。

『真臘風土記』⁶⁾ や『島夷誌略』⁷⁾ によると、カンボジアの産物に「犀角」が上がっている。東南アジアには、スマトラサイ、ジャワサイが生息していたので、クロル・ロメアスの名のとおりサイの飼育舎であることを全面的に否定はできない。アンリ・ムオのデッサンにも犀と思われる一枚があり、当時カンボジアにも犀が生息していたことを窺わせる。

正倉院の薬物に犀角があり、また犀角器もある。正倉院に残る犀角は、一角犀で南アジア・東南アジア生息のものである、と考えられている。犀角は現在、漢方薬の一つにもなっている。さて、専門家の御教示によれば、犀角は一度切っても、また生えてくる。ゆえに、アンコール王朝の時代に産物として犀角を得るために多数の犀を飼育していた可能性はある。

クロル・ロメアスは、いろいろな機能・用途を想定させるが決め手はなく、例がない遺構で動物の飼育舎かどうかとも確定しておらず、性格不明の遺構と考えておく方がよい。

7 中心祠堂を持たない建物群

(1) 滝の寺 (図28)

アンコール・ワットから北東50kmほど離れたところにプノム・クーレンと呼ぶ山がある。ジャヤヴァルマン二世が即位し、アンコール王朝を開いたとされる。

この山中には神像や千ともいわれる多数のリングが川底の岩に彫刻され、また近くに滝があって人々の憩いの場にもなっている。この滝の上に、目立たないプラサート・トゥック・テラー寺院があり、日本語訳で「滝の寺」という。寺院の中を川が流れている。最初から川をまたいで伽藍を造営している。伽藍の中を川が流れることは珍しい事例だが、岡山・後楽園の流亭のような事例もあるから、流れを伽藍に意識的に取り込んだのであろう。

クメールの寺院の中心建物は砲弾型の塔状の建物が多く、祠堂と呼ばれている。ところが滝の寺の主祠堂は砲弾型とはならず、見慣れている主祠堂とは異なる。ただ中心にある建物なので主堂ということになるが、木造小屋組を持ち瓦葺建物と考えられる。

主祠堂が木造小屋組を持つ瓦葺建物という事例は、私が管見した限りクメール寺院では他に例がない。

宗教施設ではない可能性があるし、プノム・クーレンの地域性を考慮すべきかもしれない。聖水を管理する施設といったことを考えることができるかもしれない。

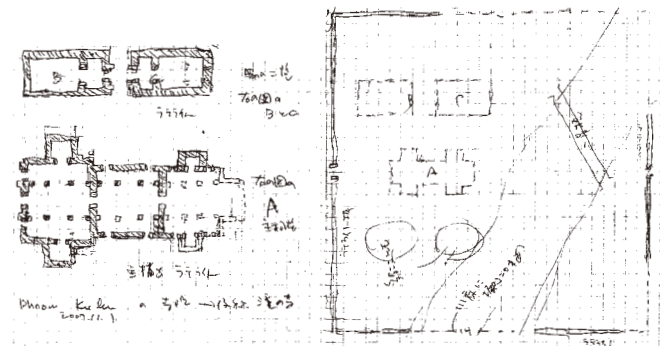


図28 滝の寺 筆者作図

(2) 南クレアン (図29)

アンコール・トムのうち、象のテラスの東に南クレアンと呼ぶ西を正面とする砂岩の建物がある。この建物の東側には顕著な建物はなく、土壇状の盛りあがり十字形に残り、石柱の残骸が散在する。

中心建物が不明確で、崇拜物を安置する装置がないとすれば、南クレアンは宗教施設ではない可能性があることになる。

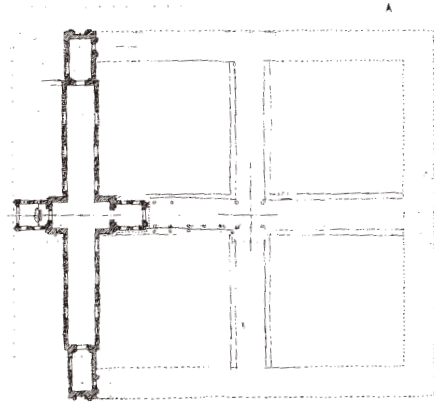


図29 南クレアン 筆者作図

8 小さい門・飾りの門

(1) 小さい門

アンコール遺跡群の中規模以上の寺院では、外の周壁に開く四辺の門は、中心区画に見合う規模のゴープラである。ここで、小さい門と取り上げるのは、中心区画がそこそこの規模を持つのに、外の周壁に開く門が中心区画に比べて極端に小さい門の事例である。少なくとも二例あり、バンテアイ・プレイ (図10) とクロール・コー (図30) の東門である。

プリア・カーンの北に、いくつかの小寺院があり、その内の一つがバンテアイ・プレイであり、クロール・コーである。

バンテアイ・プレイ寺院は東向で、寺域を囲むラテライトの塀があり南北150m、東西175mほどで、方形区画のやや西よりに中心区画がある。全体はさほど大きい寺院ではないが、堂々とした建物群が中心区画を構成する。問題はラテライト塀に開く、東西の門である。門の遺構は残りが悪く、全体を想定しきれないが、小さい門であることは確実であろう。中心区画の大きさや寺域全体の大きさに比べて極端に小さいのである。中心区画が先に造営が進み、東西の門に取りかかるときには造営規模を縮小せざるをえないような、造営事情があったのかもしれない。

同じようなことがクロール・コーにも言える。クロール・コーはバンテアイ・プレイの東2kmほどにある。全体は東向きでラテライトの外周壁で方形の区画を造り、そのほぼ中央に中心区画が

ある。外周壁に東門が開くが極端に小さい。さらに現状では、西と南北には門を認めることができない。

前述、滝の寺も東西門が極端に小さい。

門を小さくする寺院が、他にも多数あるとしたら、資金が枯渇するといった造営の事情ではなく、門を大きくする寺院とは異なった機能を持つ建物群と考えるべきかもしれない。施主の格の違い、王や王族が施主となる寺院は門を大きくし、貴族が施主となる寺院では小さくすると考えるのは一案である。施主の格差ではなく、遺跡が生きていた当時の果たした

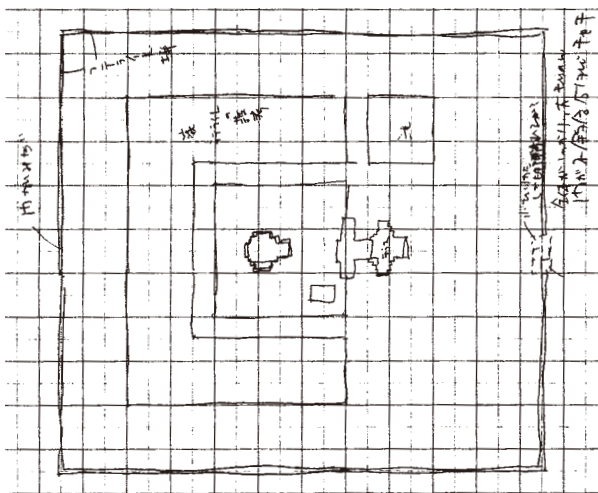


図30 クロール・コー 筆者作図

役割の違いではないか、と考えるのも、一案である。

小さい門の別の事例に、タ・プロムの外周壁に開く北脇門の事例がある。日本風に言えば、この門は穴門ということになる。タ・プロムの北外周壁のほぼ中央にある北ゴープラから東に数mの位置で、壁を一部開けて小さい門としている。ゴープラの両脇に小さい出入り口がある事例は多く、その場合、脇の出入り口はゴープラと一体となった構造である。小さい門がゴープラからすこし離れてある事例は少なく、ゴープラの脇に両脇ではなく門が一つあるだけ、という事例は他に例がなく、珍しい。

(2) 飾り門

「飾り門」と呼ぶことにした門は、建築物としては完成していて、通り抜ける門の機能を持っているが、実際には人などが通ることが想定できない門や、当初から閉鎖していて通行ができない門などである。

アンコール・ワット南北門（図11）や、バコン（図31）の南北門は出入りしなかった門と考えられる。ベンメリアやバンテアイ・チュマールは四方に門を開き、それぞれ壕に橋がかかり参道がある。実際に入入りしたかどうかは不明だが、出入りすることを可能にしている門である。ところが、アンコール・ワットやバコンの南北門は壕に参道がないから、門そのものは出入りできて、実際には使用しなかった門であった、と言える。アンコール・ワットやバコンでは、寺院の四辺に門があるべきものという概念があり、それに則って造営したもので、実際には機能しない、と考えられる。

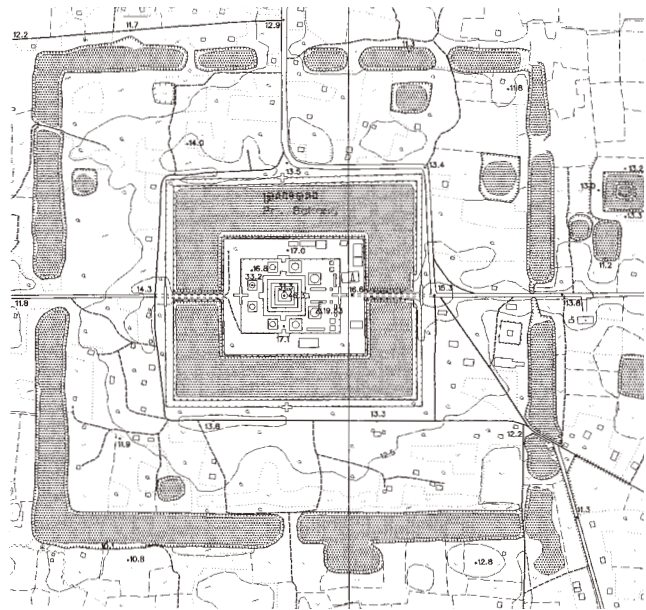


図31 バコン 出典：JICA 作成地図

前述の門と様相は異なるがチャウ・スレイ・ヴィヴォルの東門を取り上げる（図32）。チャウ・スレイ・ヴィボルはアンコール・ワットから東へ17kmほどのところにある遺跡である。この遺跡では東門から中へ入ると砂岩で積んだ壁に突き当たり、中心区画へ直進できない。中心区画全体は東を正面としていて、東門も大きく立派なので伽藍全体も東を正面としている。にもかかわらず、東門から入った後、正面の壁に阻まれて直進できず、中心区画へのアプローチができないのである。中心区画は小高い丘の上であり、東門に入ったあと左右に回ってから進むことになる。

通り抜けできない門の事例にバンテアイ・スレイの中心祠堂背後の門がある（図33）。ただし、門の様相だが祠堂として造営している、というべきかもしれない。

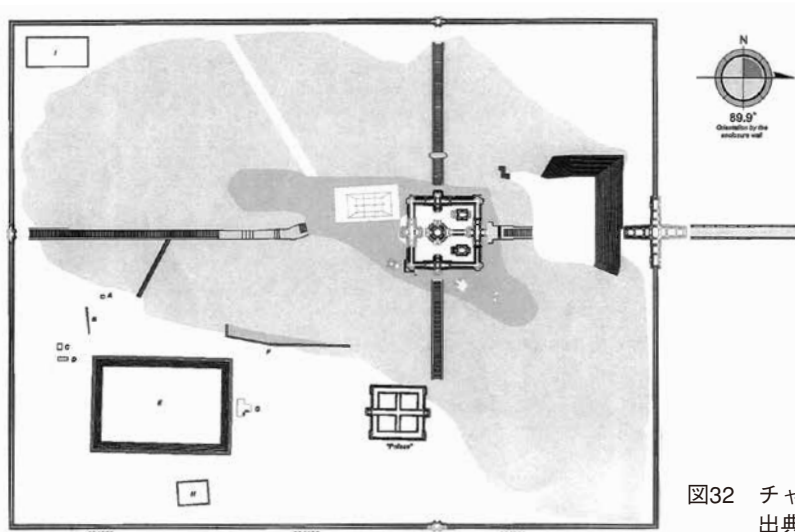


図32 チャウ・スレイ・ヴィヴォル
出典：カンボジア、アプサラ機構提供

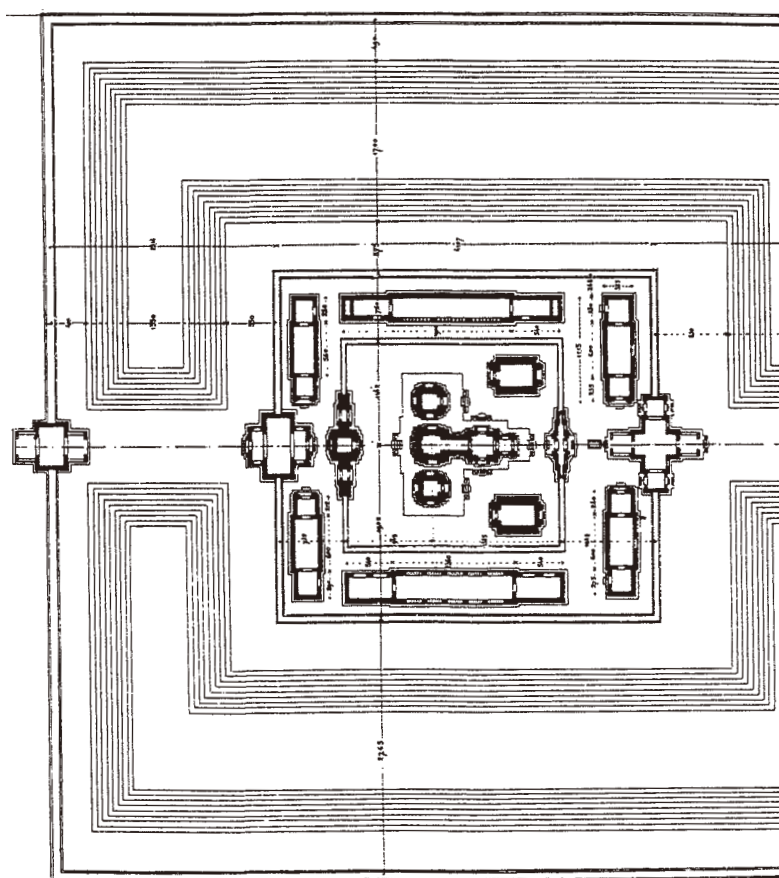


図33 バンテアイ・スレイ中心部 出典：『Le Temple D' Isvarapura』 (EFEO,1926)

9 その他、いくつかの理解できない事柄

(1) 芯をずらす壁

チャウ・サイ・デヴォーダ (図34) やトマノン (図35) のこれまでの建物配置図の多くは、厳密には正確ではない。チャウ・サイ・デヴォーダの南周壁は門の芯と壁の芯とがずれ、壁がすこ

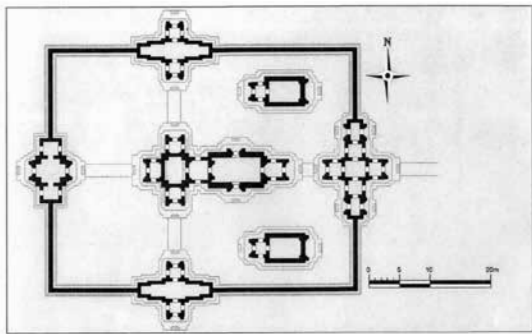


図34 チャウサイ・デ・ヴォーダ中心部
出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
著者コメント：南周壁の納まりが正しくない。

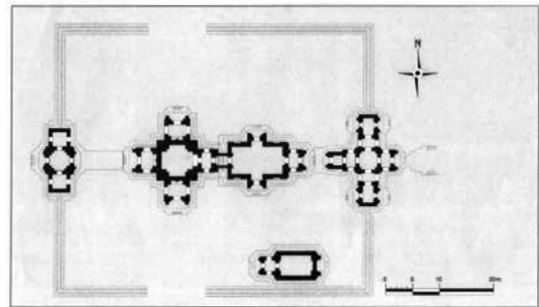


図35 トマノン 出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
著者コメント：西周壁の納まりが正しい。

し南よりになる。また、トマノンの西門に取り付く西周壁は、南側では門の芯と壁の芯が一致するが、北では芯がずれ、すこし南へ寄っている。ここで指摘した以外では、周壁はすべてゴープラの芯に納まっている。私も図と現存遺構を見比べたことが無かったので、芯に納まると思い込んでいた。現地で丁寧に観察すると微妙なずれに気づく。

アンコール・ワットでは、第三回廊の中央ゴープラの南北にあるゴープラからさらに南北に延びる回廊の長さが違う。すなわち、南側で柱間19間、北側で柱間21間である（図36）。中央区画は、中心ではなく、やや南に寄っていることになる。このように、アンコール遺跡群では、微妙に左右対称でないことが指摘されている。日本でも法隆寺では、西院伽藍の南回廊は中門の左右で長さが違い、中門が中央にないことが分かっている。

私には、理由が分からないが、たとえば東アジアでいう風水思想や、日本にある家相のような考え方がカンボジアにもあり、そうした考えによった結果、微妙にずらすことになったと考えられないだろうか。

（2） アンコール・ワットの中心区画の二種の柱

アンコール・ワットの最上段中心区画を囲む第一回廊の内側は、4区分されたオープンスペースがある。第一回廊からオープンスペース側にポーチ状の出っ張りがある。このポーチ状の先端の柱には二種類ある。八角形柱（厳密には八角の各辺は円弧になっている）と角柱が混在する（図37）。その位置には秩序が見いだせず意味不明である。そもそも意味があるのか、も不明である。中心区画で修復を行ったために二種の柱が存在することになった可能性があり、修復があったとすると、八角形柱が当初で、角柱が後補だろう。

（3） 凸凹の敷石面

アンコール・ワット（図38）やタ・ケウの中段のテラスの敷石面は凸凹が多すぎる。歩かないか、歩くとすると砂を敷いていたのではないかと考えている。参道など歩くところは敷石面の上面はほぼ平滑に仕上げているから、凸凹のままにしてあるということは、通常は人が歩かない場所と判断した方がよいからである。

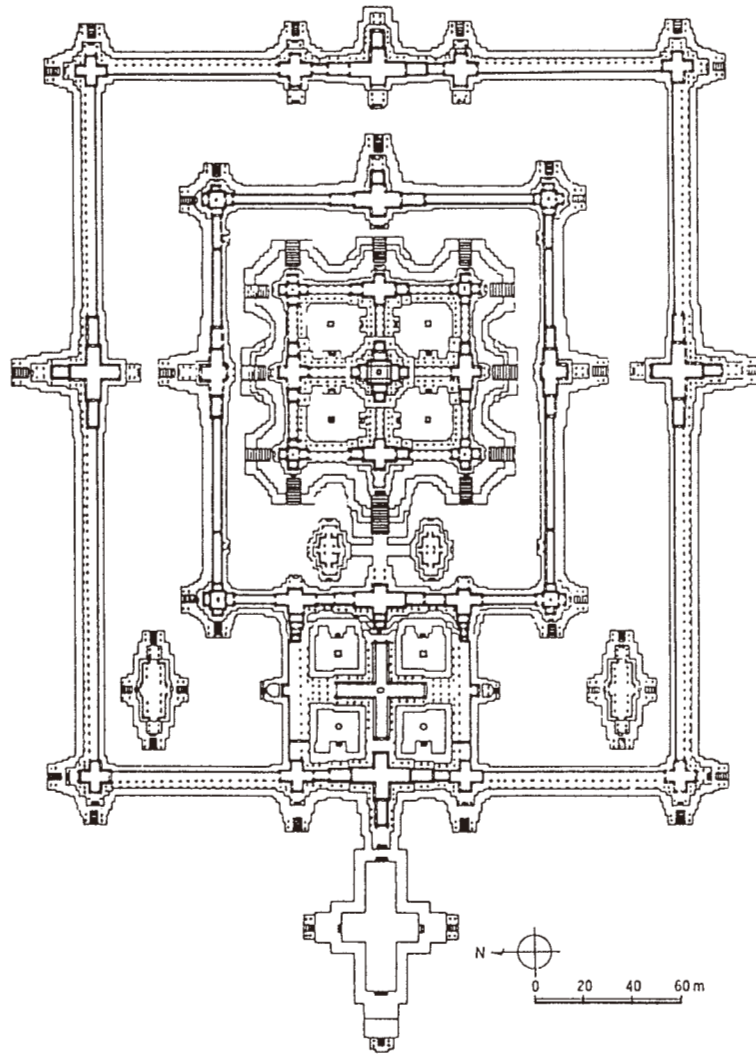


図36 アンコール・ワット中心部 出典：『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』（鹿島出版会、1982）

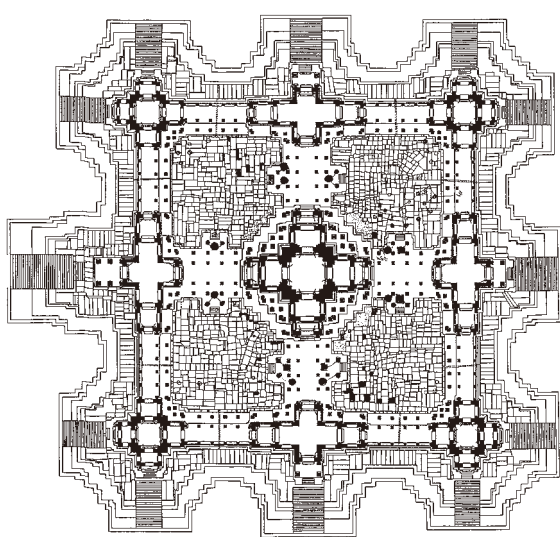


図37 アンコール・ワット最上段の区画
石敷中庭に降りる8カ所の階段で、上段両側の
柱に二種類ある



図38 アンコール・ワット中心部凸凹の敷石面 筆者撮影

二つの寺院を例にあげたが、この事例はもっとあるかもしれない。

(4) 未知の木造建造物の存在

西トップ寺院の仏教テラスには、木造建物が建っていた（図24）。その構造は謎としか言いようがない。澤田知香さんが指摘する⁸⁾ように、アンコール地域には、複数の寺院の基壇上に仮設建物かと考えられる柱穴がり、その多くは木造建物であっただろう。その実体は不明である。

(5) 二つの門

カンボジア、プリア・ヴィヘール州にあるプラサート・クナルは二つの出入り口を持ち（図39）、またコーケル遺跡群のうちプラサート・ベンも二つの出入り口を持つ（図40）。物理的には中央からの出入りではないが、ほぼ中央であり、意識上は中央からの出入りかもしれない。バンテアイ・スレイの中央祠堂背面中央には、門構え風の祠堂を置き、その南北に二つの門がある（図33）。

多くの寺院や宮殿では、中心区画に入る門は一つであるから、二カ所の門をつくることは、何か意味があるにちがいない。なお、奈良県桜井市にある吉備池廃寺は、伽藍中心部に出入りする中門が二つであった可能性があり、もし二つの中門があった寺院だとすると日本では稀有である⁹⁾。

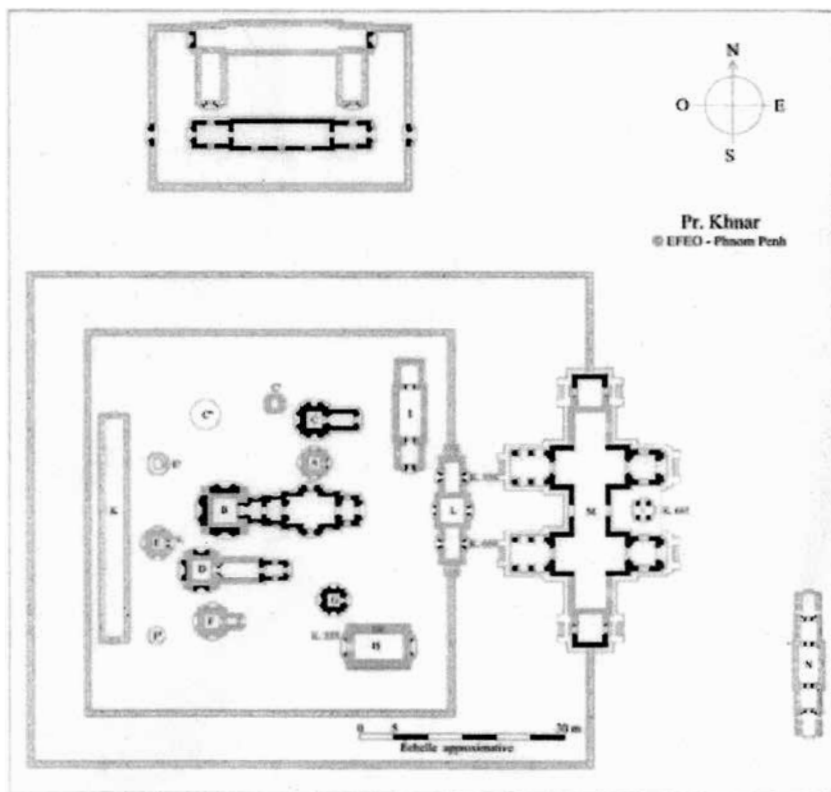


図39 プラサート・クナル 出典：EFEO・CISARK

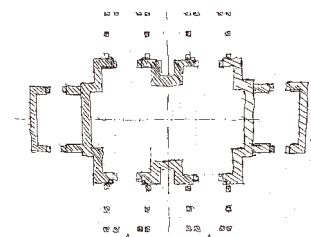


図40 プラサート・ベン、東ゴープラ 筆者作図

10 ポストアンコール期の遺構

ポストアンコール期という用語が、厳密にどの時期を指すのか近年議論が進んでいるが、時期区分を厳密に考察することが本論文の主眼ではないので、おおまかに15世紀中ころ以降として記述を進める。

南クレアン南の北東にあるヴィヘア・プランプル・ロヴェン遺跡の西端に方形土壇があり（図41）、また、バイヨンの北にあるプリア・アン・グウオクの仏像の裏手に方形土壇があり、さらにバイヨン南のワット・プリア・アン・テップの仏像の裏手にも崩れているが方形土壇がある。とすると、ポストアンコールの仏教施設では、テラスを造り奥まって仏像を安置し、その背後に方形土壇を築くのが通例ということになる。

このほか、単独の土壇がいくつか散見できる。バンテアイ・クデイには、BKC19と番号が付されている方形土壇（図42）がある。また、バイヨンの周回道路の脇、東に凸字形の土壇が、東北隅に方形土壇がある。

ヴィヘア・プラノアン・ロヴェンの西端の土壇は、17-18mほどの規模で残りが良い。東に階段跡かとも思われる痕跡があるが、階段があったかどうか不明である。

何らかの祭祀を行う場所と考えるのが妥当ということになる。ケオ・キナルさんは、これらの土壇はストウーパの基壇ではないかと指摘する。今日、ストウーパというと釣鐘型やお椀を伏せたような形をイメージするが、上に述べてきた基壇上には、現在何も残っておらずストウーパといっても木造の構築物ではないか、とも考えられる。ストウーパと呼ぶものの、木造の祠ではないか、と私は考える。木造の小建築であれば、壇上に何の痕跡も残していない状況は首肯できるからである。

バンテアイ・クデイの方形土壇 BKC19は、中心区画の東南100mほどのところにあり、東西4.4

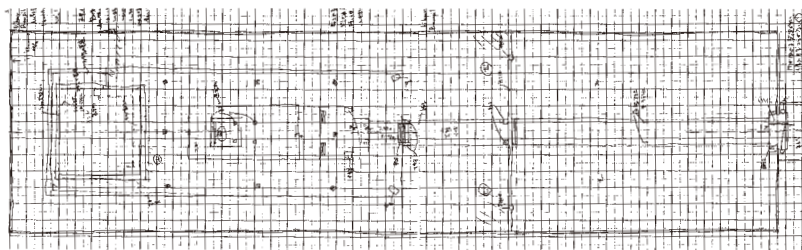


図41 ヴィヘア・プランプル・ロヴェン 筆者作図



図42 バンテアイ・クデイ内の方形土壇 (BKC19)
筆者撮影

m、南北7.3m、高さ2.5mほどである。周囲をラテライトで囲む低い基壇があったかもしれない。

ストゥーパというと、一般的には釣鐘型、半円球の構築物で内部空間がない物をいう。しかし、たとえばラオスのワット・プーではストゥーパと呼ぶ構築物は内部空間を持つ小祠堂とでもいうべき建物である。だから、木造の小祠堂をストゥーパと称して、崇拝する対象としたことはあり得ると考えることができよう。

まとめ

寺院、遺構が古いか・新しいかという時間軸を無視して、気づくことを列挙した。時間や王ごとに整理すると、分かることがあるかもしれないが、筆者の力量を超えている。将来の研究に解明を委ねたい。

偽窓・偽扉、飾りの門・飾りの参道、瓦を模した屋根などを、前身建物の形を受け継いだ結果であり、実体が無く見かけを整える現象として把握すべきだろうか。2節の小結で述べたように近代的・合理的な考え方と齟齬があっても、前近代では問題とはならなかったと考えられよう。現在では不思議で理解できない造型・空間は、全体の形や様相を整えるためであれば、問題にならず採用されたであろう。

謝辞

カンボジアでの遺跡観察は、上智大学アンコール遺跡国際調査団（団長石澤良昭）の一員として参加した現地調査の傍らに実施した。カンボジア滞在の機会を与えていただいた調査団にまず感謝する。故人となったが現地でケオ・キナル氏から多くの示唆を得た、記して感謝する。また、犀の飼育・犀角について、恩賜上野動物園の寺田光宏さんから御教示を得た。記して感謝する。

本稿の主旨は2011.4.9に開催した第52回東南アジア彫刻研究会（肥塚 隆主催、於大阪人間科学大学）で発表した。わたしの報告に対して、参加者から多くの示唆を得た。記して感謝する。

注

- 1) バンテアイ・クデイの遺構番号は『バンテアイ・クデイ建物一覧（案）』（上智大学アンコール遺跡国際調査団、1997）による。
- 2) Claude Jacque and Michael Preeman 『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
- 3) Jacques Dumarcay 『ARCHITECTURE and its MODEL in SOUTH-EAST ASIA』（ORCHID PRESS, 2003）
- 4) 『西トップ遺跡調査報告—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—』（奈良文化財研究所、2011）
- 5) ブリュノ・ダジャンス 『アンコール・ワット』（創元社、1995）
- 6) 周 達観 『真臘風土記』（和田久徳訳注、平凡社、1989）
- 7) 『島夷誌略』（[zh.wikisource.org/wiki/ 島夷誌略](http://zh.wikisource.org/wiki/島夷誌略)）に寄る。
- 8) 澤田知香 『クメール建築における木造建物の復元的研究—宗教建造物を中心に—』（奈良女子大学博士学位論文、2008）
- 9) 『奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告』（奈良文化財研究所、2003）

参考文献

- アンリ・ムオ 『インドシナ王国遍歴記』（中公文庫、2002）
ブリュノ・ダジャンス 『アンコール・ワットの時代 国のかたち、人々の暮らし』（連合出版、2008）

- 佐藤 桂、中川 武、下田一太「クメール寺院の「宮殿」と呼ばれる付属建物について—カンボジア コーケーに関する研究（Ⅲ）」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2008）
- 石塚光雅、中川 武ほか「チャウ・スレイ・ビボールにみる配置計画に関する一考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2011）
- 島田麻里子、中川 武ほか「アンコールからコンボンスヴァイのプレア・カーンに至る王道沿いに分布する宿駅寺院」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2011）
- 溝口明則、中川 武監修『Koh Ker and Beng Melea』（名城大学、早稲田大学、2011）